

## E 特別支援学校（知的障害）

### （1）学校の概要

E特別支援学校（知的障害）は、知的障害を主に対象とする特別支援学校である。小学部14学級、中学部13学級、高等部17学級、237名が在籍している。在籍者は今後も増える見込みで、昨年度にユネスコスクールに加盟しており、「共生社会の実現」をテーマに自分の力を発揮する活動、社会に参加する活動、社会に役立つ活動を重点に置き教育に取り組んでいる。

自閉症を有する児童生徒が約半数を占めているため、教室内は構造化されており、着替えや学習の場所、休憩スペース等を作り、活動が分かり易いように工夫されていた。

### （2）ICT 活用の状況

ICTの活用については、平成23年度からタブレット端末を積極的に活用しており、平成26年度からは就学奨励費を用いて高等部の1年時にiPadを購入し一人一台の専用端末として授業で用いている。iPadの管理について力を入れており、充電する場合についての教員間での取り決めや、システムアップデートやアプリのインストールについての管理など工夫がされた取組が行われている。また、人的リソースとしてICTコーディネーターが指名されており、指導内容でのICT活用についての支援を行っている。

### （3）事例

#### 1) iPod の文字入力機能を活用した事例「文字を入力して伝えよう」

小学部では「文字を入力して伝えよう」という題材で、表出が殆どなく自分の意志を伝えることが難しいという課題を持つ児童に対しての指導場面であった。指導内容はiPadに提示された平仮名と絵を下に、児童の手元にあるiPodに平仮名を入力し音声出力をするという内容だった。この日の内容は名詞で3文字（促音や拗音を含む）の単語が提示され、それをみて児童がフリック入力し音声出力するというものだった。この取組を行うまでは、児童にとっての表出手段がなかったため、意志の疎通が一方通行のものとなっていたが、現在ではiPodを用いて簡単な単語レベルであれば表出をするようになってきている。家庭においても活用されており、食べたいものやしたいことを表現することができているとのことだった。担任からは、今後更に語彙を増やすよう指導する予定とのことだった。



図 4-2-2 iPod の文字入力機能を利用した実践

### 2) 遠隔中継機能を利用した事例「丁寧な受け答え（電話での対応）」

中学部の授業は、「丁寧な受け答え（電話での対応）」という題材名で、電話での受け答えの練習を距離の離れた二つの教室間の内線電話を利用して指導する内容だった。場面設定としては、順番に一人の生徒が別の教室に向かい、そこで電話を受けるがその際、他の生徒がいる教室には Facetime を用いて、その様子が遠隔中継されていて、他の生徒は電話を受けている生徒の様子を見ることができる。そこで電話を受けた生徒は、電話の受け答えの様子と電話で指示された内容を正確に実行できたかを見ることができる。実行した評価は別の生徒が電話の受け答えをした生徒が教室に戻ってきてから行う。別教室での生徒の様子を Facetime の画面により共有できることで、それぞれの生徒が行った内容について全員で話し合えることから、内容の反復ができていると感じられた。



図 4-2-3 遠隔中継機能を利用した電話練習

### 3) 野外活動の事前学習の事例

高等部の授業は、野外活動の事前学習において、野外活動を行う施設の場所を地図アプリで探すというものだった。短い時間の見学となったが、高等部ではこの他には学習アプリを用いて、数学などに活用しているとのことだった。平成 26 年度から一人一台を使用する環境になり、それぞれの生徒にあったアプリを導入することができるようになってきていることが活用のしやすさに繋がっていると思われる。

#### 4) 生活で接する機械の使い方を学習する事例

iPad を用いた駅での切符の発券と改札の通り方や、ファミリーレストランにおいてのドリンクバーの使い方の学習事例を紹介された。

前者の事例では、iPad を券売機を模した模型にはめ込み、iPad 画面上に表示された券売機の模倣画面を操作することで、実際に表示されるメッセージを確認しながら、目的地までの切符を買う操作ができる。また、改札の通り方については、交通系電子マネーのカードを使った改札方法で、iPad にタッチ画面を作り、生徒がタッチしたときにリモートで画面を操作して、実際にどのようなメッセージが出るかを学習できる。

後者の事例では、ドリンクサーバーの前面パネルを iPad に表示し、生徒が好きな飲み物のボタンを押すとそれに応じた飲み物が注がれる映像がでるようにしたもので、授業の中で実際のファミリーレストランでどのように行動するかを具体的にイメージできるような工夫がされている。

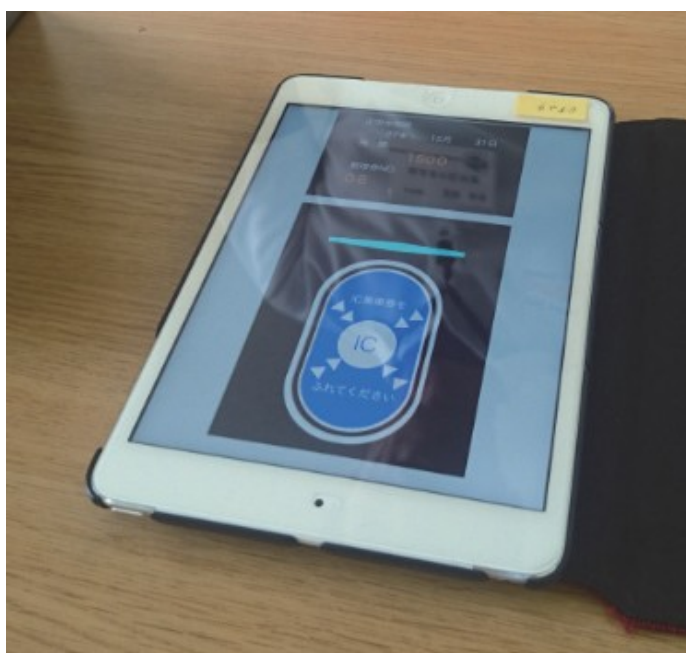


図 4-2-4 交通系電子マネーのタッチ画面を模した画面

#### (4) 特徴的な点に関するまとめ

1) の事例では個に応じた取組、2) の事例では生徒同士の主体性を育み、生徒同士のやりとりを介しながら電話の受け答えでどのようにするかを考えさせる取組、3) では、従来行われてきた調べ学習、4) ではシミュレーションをすることで狙いの活動で具体的にイメージできるような学習のように多様な取組がなされている。このことは、ICT コーディネーターが指名され、教員からの求めに応じて個別指導計画の作成の支援を行っていることなどが大きく影響していると考えられる。

(横尾俊)

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「C-94 障害のある児童生徒のための ICT 活用に関する総合的な研究—学習上の支援機器等教材の活用事例の収集と整理—」（平成 28 年 3 月），77-79 に記載された内容である。